

待兼山俳句会

第六百八十一回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和五年十一月二十日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木兵十郎・鈴木輝子・寺岡 翠

東中 乱・向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者 植田真理・碓井遊子・草壁 昂・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美

中村和江・西川盛雄・根来眞知子・東野太美子・平井瑛三

出席者十一名＋投句者十一名 計二十二名

兼題 神渡・木の葉（幹三） 小春・報恩講（暁子） 当季雑詠 通じて八句

次回 例会 令和五年十二月十八日（第三月曜日） 会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

兼題 冬の川・外套（幹三） 冬籠・障子（暁子） その他当季雑詠

選者吟 降り積る木の葉の音や夜の闇 幹三

小春日や分れてもまた出合ふ道

みづうみをぎざぎざにして神渡島

小春日や句会の隣り絵画展 暁子

木の葉散る束の間旅をするやうに

踏んでゆく我も落葉のやうなもの

幹三 選

◎神渡ジャングルジムにただひとり

六百回目金剛山頂初冠雪

小春日やたてたてよこと窓を拭く

ひとしきり木の葉の落ちてあと静か

◎木の葉散り大きな埒あらはれし

小春日や父の遺せし革靴

鐘を打ち村の末寺も報恩講

食道を白湯通り抜く報恩講

木の葉焼く明日散るものはあしたまた

◎縁小春同じ話にまた笑ふ

小春日に猫背が伸びる散歩道

逆さ富士乱し過ぎたり神渡

収穫を終へて小寺の報恩講

◎鍋底に目玉ころりと金目鯛

何もせで小春の午後を過ぎしけり

◎日かげりてすたと消えし小春かな

浅き瀬の岩に塞かるる木の葉かな

一斉に竹撓らせて神渡

切り株の年輪数ふ小春の日

真理

翠

和江

暁子

太美子

真理

太美子

兵十郎

輝子

輝子

朱美

兵十郎

邦夫

兵十郎

安廣

兵十郎

堯子

堯子

兵十郎

街路樹の木の葉の数がわかる朝

朱美

◎縁側に祖母の椅子在り小春かな

堯子

小春日や背負ふ荷のやや軽しとも

眞知子

◎小春日や名前忘れし人のこと

言成

神渡ひとりパズルを解く真夜に

輝子

残り柿才女も老ひてしまはれて

かな子

石段に葉つば散り敷く神渡

茉衣

木の葉焼く古き手紙もそつと混ぜ

輝子

立冬や白湯ひと椀の旨さかな

かな子

雨上がりほつこり帰る報恩講

恵子

幹三 特選句講評

・木の葉散り大きな埒あらはれし

太美子

子を育てている間は隠れていた鴉の巣も、巣立った後は丸見えになります。そして来年また葉が繁る頃、鴉は同じ樹に巣を作ります。悠久の繰り返しを思った一句。

・神渡ジャングルジムにただひとり

真理

ジャングルジムという遊具の構造と、神を送ると言われる西風の取り合わせが面白いと思いました。大人が一人でいる理由…これも読者に任された「余白」。

・縁小春同じ話にまた笑ふ

輝子

長いつき合いを経た気心の知れた仲間たちなのでしょう。賑やかな声が聞こえてくるようです。なんだか得したような冬の一日。

・縁側に祖母の椅子在り小春かな

堯子

縁側と小春は、やはりよく合いますね。日のあたる縁側でおばあ様は何を思っていたのでしょうか。作者とのつながりもいろいろと想像されます。

・小春日や名前忘れし人のこと

言成

ある言葉、ある仕草、ある出来事が先に思い出され、名前は出てこないことが近頃増えました。小春日、遠くを見ながら思いを馳せている作者が目に見えかびます。

・日かげりてすんと消えし小春かな

兵十郎

いくら暖かいと言ってもやはり冬。日がかげると「正体」を現わします。すんとというオノマトペと小春の組み合わせが効いています。

・鍋底に目玉ころりと金目鯛

兵十郎

深い海に住むこの魚は冬の美味。名前の由来になっている目玉がころりという措辞に俳味があります。完食した鍋、さぞかしおいしかったことでしょう。

暁子 選

六百回目金剛山頂初冠雪

翠

◎エスケープ君と箕面へ紅葉狩

乱

小春日やたてたてよこと窓を拭く

和江

短調の波響きたる冬の浜

真理

小半時みんな良い子で報恩講

輝子

神渡新島生まる西の海

和江

鐘を打ち村の末寺も報恩講

太美子

小春日が小夏日になる高気温

茉衣

白波と白雲連れて神渡

邦夫

親鸞忌電飾豪華御堂筋

翠

さつと降る櫛大路の木の葉雨

瑛三

逆さ富士乱し過ぎたり神渡

兵十郎

収穫を終へて小寺の報恩講

邦夫

一斉に竹撓らせて神渡

堯子

◎八百万の神居る平和神渡

翠

◎問はず語り妻にぽつぽつ庭小春

乱

ありふれた昼ありふれた時雨かな

幹三

夜の紅葉さながら能の舞台めき

遊子

落人の郷の夜神楽神渡る

盛雄

◎弱り目に祟り目神はみな出雲

かな子

樹令問ひ百年にわく子木の葉散る

恵子

外つ国に友逝きしとぞ氷雨降る

安廣

暁子 特選句講評

・エスケープ君と箕面へ紅葉狩

乱

待兼山句会の会員の中で、石橋の学舎で学んだ方々は誰もがこんな経験をされたのではないだろうか。過ぎ去った青春を楽しむ作者の俳諧精神を讃えたい。

・八百万の神居る平和神渡

翠

日本の神道ではあらゆる自然現象や物に神が宿つてい
ると考え、その神々を崇めてきた。日本人はその無数の
神々によって守られてきたとされている。今、世界に起
こっている戦争を念頭に置かれた句であろう。因みに作
者は例会の前日、金剛山登頂六百回を成し遂げられた。
金剛山の神が守り下さったのであろう。「神居る」は敬
語の「神坐す」(ます) か？

・問はず語り妻にぼつぼつ庭小春

乱

夫は何を語り出したのだろう、問われもしないのに。
そうさせたのは心地良いお天気。穏やかな小春の庭を前
に、睦まじいご夫婦。

・弱り目に祟り目神はみな出雲

かな子

何か神頼みをしたような重大なことが起こったのであろう。それが丁度十一月で神々が出雲へ出かけられた留守中のことで、神頼みもできない無念さ。

互選三句

朱美 選

短調の波響きたる冬の浜

真理

団欒の窓の明るし冬の月

安廣

車椅子連なりてゆく報恩講

暁子

その群れの中に私がいる日も遠くないかな？

瑛三 選

小春日やたてたてよこと窓を拭く

和江

木の葉焚く煙一筋青き空

安廣

日かげりてすたと消えし小春かな

兵十郎

滑稽味のある句。「すたと」が面白い。

和江 選

縁小春同じ話にまた笑ふ

輝子

雨上がりほっこり帰る報恩講

恵子

小春日や分かれてもまた出会う道

幹三

あの人も好きな道らしい、小春日の小さな驚き。

かな子 選

いそぐ雲追う雲ありて神渡

太美子

小春日や名前忘れし人のこと

言成

木の葉焼く明日散るものはあしたまた

輝子

明日は明日の風が吹く。明日の考えよう。考えよう。

邦夫 選

よろづ屋の中に吹き込む木の葉かな

幹三

亡き母に問ふことありし報恩講

恵子

鐘を打ち村の末寺も報恩講

太美子

農村などの末寺では収穫を終えた頃に報恩講を催す。

恵子 選

いそぐ雲追う雲ありて神渡

太美子

小春日やたてたてよこと窓を拭く

和江

恥の身の末席汚す報恩講

昂

恥の文化を考える作者はどんなお方かしらと思いました。

言成 選

さつと降る櫓大路の木の葉雨

瑛三

木の葉追う風と箒の競い合い

朱美

いそぐ雲追う雲ありて神渡

太美子

青空を流れる雲を眺めると神渡を見あげているようだ。

堯子 選

日を追うて変わる野山の秋日和

瑛三

短調の波響きたる冬の浜

真理

日かげりてすたと消えし小春かな

兵十郎

日が陰ると感じる寒さに、小春の温かさを表現された事。

輝子 選

小春日や背負ふ荷のやや軽しとも

眞知子

木の葉散り大きな埒あらはれし

太美子

日かげりてすたと消えし小春かな

兵十郎

天候の急変。中七に軽みがあり、絶妙の表現。

兵十郎 選

問はず語り妻にポツポツ庭小春

乱

小春日や背負ふ荷のやや軽しとも

眞知子

木の葉散る束の間の旅するやうに

暁子

木の葉の散り落ちる間を旅と捉えた作者の感性に脱帽。

茉衣 選

木の葉焼く明日散るものはあしたまた

輝子

神渡ジャングルジムにただひとり

真理

降り積る木の葉の音や夜の闇

幹三

夜遅く風雨に散らされる大量の木の葉の音は空恐ろしい。

眞知子 選

小春日に誘われゆくかまた訃報

暁子

報恩講代替りらし顔の見え

輝子

生かされて生きてゐるなり親鸞忌

邦夫

そうです、生かされて生きてきたのです、この年まで。

真理 選

鍋底に目玉ころりと金目鯛

兵十郎

葡萄枯れ葉はそれぞれに綾模様

和江

みづうみをぎざぎざにして神渡

幹三

ダイナミックな波形の描写が素晴らしいです。

翠 選

春日に猫背が伸びる散歩道

朱美

食道を白湯通り抜く報恩講

兵十郎

木の葉焼く古き手紙もそつと混ぜ

輝子

昔私も似たことをやった、今は禁止。

盛雄 選

木の葉散り木々それぞれの素の姿

眞知子

プリズムの如光撥ねつつ木の葉散る

安廣

小春日やたてたてよこと窓を拭く

和江

窓を拭くのに良い小春日和である。心和む佳句である。

安廣 選

日かげりてすたと消えし小春かな

兵十郎

縁側に祖母の椅子在り小春かな

堯子

木の葉焼く古き手紙もそつと混ぜ

輝子

古手紙を焼く後ろめたさのようなものをうまく表現した。

遊子 選

親鸞忌電飾豪華御堂筋

翠

地下足袋の足裏さくと木の葉径

兵十郎

小春日や分れてもまた出合ふ道

幹三

人間関係やものの見方の変遷にも通じる隠喩の趣き。

乱 選

小春日の二人ゆっくりあてどなく

邦夫

白波と白雲連れて神渡

邦夫

木の葉降る天より詩ぞ舞ひ降るる

邦夫

降る木の葉を詩となし、天のミューズが詩を授ける。

訂正（六七九回句会報 七頁上段 遊子選）

誤 移民とも棄民とも言ひ新松子

幹三

正 移民とも棄民とも言ひ新松子

兵十郎

参加者自選句

小春日に猫背が伸びる散歩道

朱美

神渡祝福送るハネムーン

瑛三

報恩講久しき京へ連れ立ちて

和江

芋虫よたまにはコロロと鳴き給へ

かな子

木の葉降る天より詩ぞ舞ひ降るる

邦夫

小春日や見つめ合ふ手話笑み二人

恵子

浮雲はみんな東へ神渡

言成

たたなづく青垣山や秋霞

堯子

母許のなじみきし樹々庭小春

太美子

縁小春同じ話にまた笑ふ

輝子

逆さ富士乱し過ぎたり神渡

兵十郎

一步二歩踏み出さんかな鳥渡る

昂

銀杏散る街路を駆けるランドセル

茉衣

木の葉散るゆるりと時をめぐらせて

眞知子

神渡ジャングルジムにただひとり

真理

六百回目金剛山頂初冠雪

翠

水の輪に舞ひ立つ風の木の子かな

盛雄

何もせで小春の午後を過ぎしけり

安廣

鴨の列迷子の鳥の紛れ込む

遊子

仲間去り残る木の葉も震へをり

乱

即吟

卓上に赤い実をつけた千両が飾られました。
お互いに評価し合う時間は取れず、発表だけいたしました。

坪庭の一隅灯す実千両

暁子

来る年の平安祈る千両や

恵子

新米の庭師千両刈り込みり

邦夫

千両の赤さ鮮やか気忙しく

堯子

一隅のぽつとあかるし実千両

輝子

句座に紅加へて明かし実千両

兵十郎

万両に負けるものかと頭上げ

茉衣

昏きより千両剪りて人前へ

幹三

おしやれせずなりて久しや千両赤

翠

赤き実を髪挿にしたき千両かな

安廣

万両は下向き千両上を向き

乱

新年会へのお誘い

日時… 令和六年一月十五日十二時より

(句会開始は十四時)

場所… 大阪倶楽部二階食堂

料理… オードブルからコーヒまで

食事代… 三三〇〇円

会費… 三〇〇〇円(会から援助あり)

申込締切… 十二月十八日までに東中乱さんまで

会費値上げについて

会計係 寺岡翠

待兼山俳句会の会費は月額一、〇〇〇円でありましたが、少し経費が余つて来たとの事で本年は年額一〇、〇〇〇円を徴収させて頂いております。しかしながら最近会報編集の外注を始め経費が増えてきております。つきましては会費を元の年額一二、〇〇〇円に戻す事を提案し、六八一回例会において各位のご諒解を得ましたので、令和六年より以前の年額一二、〇〇〇円に改定させて頂きたいと思ひます。諸事多端の折りから誠に恐縮ですが、ご諒解の程よろしくお願い申し上げます。

ひとこと

山田安廣

十一月に入って気温の変化が激しい日が続いております。皆さまお変わりなくお過ごしでしょうか。

六八一回例会では披露の後「神渡」「報恩講」という難しい兼題について、お二人の選者を中心に出席の皆さんが色々な角度から議論が行われました。殆ど三十分にはわたって話に花が咲き、これこそ対面の句会の楽しさだと感じ入った事です。